第3回地域連携コンソーシアム

グループ協議のまとめ

協議①「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」秋田大会について

【成果】

- ・これまでの取組を知る良い機会になった
- ・ワークショップが多様で充実しており、学びの場の拡大を実感できた
- ・体験を通じた情報共有、障害理解の深まり
- ・講演内容から多くのヒントを得た
- ・当事者や学校関係者の参加が多かった
- ・障害当事者の能力発揮の機会になった

【課題】

- ・市町村職員等の参加が少なかった
- ・一体感のある会場の工夫
- ・遠方の方が参加しやすい工夫
- ・開催日時、もっと当事者や市町村職員等の参加を増やす周知などの運営方法
- ・公民館にもっと役割があってもよい
- ・様々な障害種の方の参加を増やす工夫

協議②地域連携コンソーシアムについて

【成果】

- ・市町村教育委員会への情報提供ができた
- ・様々な立場の方との関係づくりと知見(資源)の共有ができた
- ・学校教育と社会教育のつながりが深まった
- ・何かできそうな期待感をもてた
- ・生涯学習の必要性の理解と認識が深まった

【課題】

- ・民間企業、ボランティアサークル、地域のスポーツ団体等の資源を活用する
- ・当事者のコンソーシアムへの参加や話合いの場の設定をする
- ・誰でも参加できる取組になるよう、学習プログラム名を工夫する(障害や共生社会などの堅い名称ではなく)
- ・より一層、コンソーシアム委員同士のねらいや目標の共有、各委員の取組を知る機会にする
- ・各地域でのワークショップを開催する

令和6年度 第3回地域連携コンソーシアム 総括

【山口副委員長】

- ・多様な人が集まったことで、様々な人が本事業について興味をもっているということが分かった。
- ・これまでの取組を生かして、障害者にとっての楽しい居場所づくりが進んでいくとよい。
- ・障害者の生涯学習がなぜ必要なのかということについて、健常者中心の社会を変えていくことに大きな意味があり、このことが生涯学習の活性化にもつながる。
- ・障害者の生涯学習の取組は、引きこもりや不登校などの社会的課題まで広がる可能性がある。

【藤井委員長】

- ・秋田県のコンファレンスについて、昨年度まではよい意味でカチツとした堅さがあったが、今年度のコンファレンスは新たなチャレンジが感じられ、「交流」「開放」「連携」「協働」というキーワードが当てはまるものであった。
- ・今後、コンファレンスを続けていくとすれば、生涯学習見本市のような形で行うことで、当事者・関係者ともに身近に生涯学習を感じていただけるようなカタチで行ってみてはどうか。
- ・これまでの秋田県の事業において、生涯学習のコンテンツをはじめ、関係者の連携・協力のモデルについても好事例が数多く生み出されてきた。
- ・特別支援学校においては「キャリア教育の充実と生涯学習の推進」といった観点で、学校教育段階から生涯にわたる学びの大切さを重要視しており、この流れも本事業の成果と考えている。
- ・今後は、これまでの取組が、障害のある当事者に伝わっていたか検証し、いかに当事者や周囲の方の生涯学習の心に火を付けられるかが大切であると考えている。
- ・本事業の目指すところは、共生社会の実現であり、そのためには、生涯学習の場において障害者・健常者双方の、無意識の遠慮や排除をなくしていくということが大事である。